

## <タイトル> 手 作 り の 外 国 旅 行 の す す め

### <内容>

学生時代から旅行が好きで、入社後も仕事の合間をぬって旅行をしている。(旅行の合間に仕事をしているのかもしれない・・・)ここ7年半の間に「米国・インドネシア・フィリピン・メキシコ・マレーシア・フィリピン・ジャマイカ・マレーシア・韓国・タイ・バハマ・オーストラリア・韓国・オーストラリア・香港・メキシコ・タイ・韓国・スリランカ・台湾・ドミニカ・オーストリア・韓国・インドネシア・オーストリア・韓国・米国・オーストラリア・マレーシア・韓国・米国・中国」というように、32回海外に出かけた。

私の旅行パターンは2つに分かれる。第一は、土・日曜日を利用した近場(韓国等)への旅行で、長くても5日程度の小旅行である。現地では町をぶらぶらしていることが多い。百貨店・市場・スーパーマーケット・コンビニなどに行けば、物価水準や生活ぶりがわかってとても面白いし、たまには風呂屋や床屋に入ってみることもある。とにかく好奇心をもって何でも見てやろうという精神である。そして、もちろん食事は大きな楽しみである。地元の人たちの行くレストランは驚くほど安いし、そしておいしい。(口に合わないこともあるが、それもよい経験である。)本場の料理は想像以上にヴァリエティに富んでいるし、日本流にアレンジされた『外国料理』と大違いのことも多い。

第二は、連休や夏休みを利用した比較的長め(1~2週間)の旅行である。この旅行では、とにかくのんびりすることが目的なので、基本的には1か所に滞在して動かない。いわゆるリゾートに行くことが多いが、せっかく外国に行くのだからなるべく日本人の少ない所を選ぶ。日本人の行く所は結構限られているので、有名な観光地から1時間も移動すれば、日本人に荒らされていない素朴なリゾートが無数に存在している。最近では、こうしたリゾートを探すのも楽しみになっている。(例えば、米国のフロリダ半島で日本人がよく訪れるのはマイアミ・オーランド・キーウエストくらいだが、実は半島全体が素晴らしいリゾートで埋めつくされている。)現地ではとにかくのんびりと過ごす。まず、朝は自然に目が覚めるまで寝ていて、起きても髭など剃らない。軽い朝食をとったあとは景色のよい所に腰を落着け、好きな音楽を聴きながら好きな小説をじっくりと読む。喉が乾けばビールを飲み眠くなれば昼寝をする。気が向けば泳いだりゴルフをしたりハイキングをして体を動かす。そうしているうちに日が暮れるので、食事をとる。すると、眠くなるので朝まで寝てしまう。というのが典型的な1日だ。

毎日このような生活をしていると、無精髭が生え揃い山男のような風貌となった頃には、俗世間のことはすっかり忘れ幸福な気持ちになっている。命の洗濯という言葉がぴったりだ。

このように書いてくると楽しいことばかりのようだが、私の旅行は観光付きのパッ

ク旅行というわけではないので、準備に手間がかかる。飛行機はいわゆる格安チケットを使うことが多いが、旅行会社によって料金の違いが結構大きいので、こまめに電話をして確認するようにしている。また、ホテルについては予約専門会社（レップ）で予約をしたり、場合によっては現地に手紙やFAXを送って予約をしているが、現地在オフ・シーズンであれば予約なしで出発して現地で気に入ったホテルに泊まることもある。

現地でのトラブル・アクシデントも数多い。飛行機が欠航したり、オーバー・ブッキングのため取残されてしまったこともある。到着した空港で自分の荷物が出てこなかったことも何度もある。予約したはずのホテルに予約が入っていないくて、深夜に別のホテルを探したこともある。タクシーの運転手にぼられたこともあれば、釣銭詐欺にあったこともある。暴力バーで法外な請求をされたこともあれば、床屋だと思って入った店が実はいかげわしい店だったということもある。夫婦とも食中りで苦しくなり夜中に医者を呼んだこともあれば、体調を崩し旅行中ずっと寝込んでいたこともある。とにかく枚挙に暇がないほど多くのトラブル・アクシデントがあった。しかし、それも今ではよい思い出である。

<理由>

私の場合、外国旅行の楽しみは2つある。

第一は、異なる文化との接触である。もちろん、短期間の旅行では表面的なことしか分からないのだが、それでもなかなか面白い。食事作法一つとっても国によって様々である。例えば、米の食べ方でも、箸を使う国・スプーンを使う国・フォークを使う国・手を使う国・・・。（ちなみにフォークの背に米を乗せて食べるという奇妙な食べ方をするのは日本人だけだ。）異なる文化に浸っていると、日本を客観的に見つめることができる。今まで当たり前だと思っていたことが、アジアあるいは世界という尺度で考えてみると特殊なことだということもしばしばである。そうした経験をするのが外国旅行のよさだと思う。

第二は、長めの旅行をするときの場合だが、解放感に浸り心底のんびりすることである。円高のお陰で、安い料金で素晴らしいリゾートに長期に滞在することも可能である。米国を例にとってもとにかく物価が安い。ものにもよるが、日本の半額以下の感覚である。ゴルフは2000円程度でできるし（これなら毎日できる！）、スーパーマーケットに行けば缶ビール1本30円という世界である。特に現地でのオフ・シーズン（例えば、米国のフロリダ・アリゾナ、カリブ諸国の夏）を狙えばホテル代は驚くほど安くなる。航空運賃も滞在費に加えれば日本でも同様の過ごし方ができるではないかといわれることもあるが、航空運賃は異なる文化を楽しむための対価と割切って考えている。

### <セールスポイント（おすすめ）>

自分の旅行スタイルを押付けるわけではないが、皆さんにパック旅行ではない手作りの外国旅行をお勧めしたい。もちろん、パック旅行に比べれば準備に手間がかかるし、現地での小さなトラブル・アクシデントも多いだろう。しかし、その分だけ印象深い旅行になると思う。皆さんにお勧めしたい旅行先は数多くあるが、ここでは1か所だけ挙げてみる。それはオーストリアのチロル地方だ。

そもそもオーストリアというとウィーンが有名で、それ以外の地方はあまり馴染みがないかもしれないが、たいへん自然に恵まれた国だ。そして、特筆すべきは物価の安さである。（私はよく旅行をするので、回数をこなすためにどうしても物価の安い地域に惹かれてしまうのだが、スペイン・イタリア等の南欧を除けば、ヨーロッパ先進諸国の中でも最も物価の安い国ではないかと思う。）チロル地方はオーストリア・アルプスの中心であり、冬はスキー、夏はハイキングと1年中楽しめる。従って、ヨーロッパ中の人々が訪れる人気エリアであるが、時期を選べば驚くほど空いている。夏のシーズンの前後（5月～6月あるいは9月～10月）がよいと思う。

まず飛行機だが、大韓航空が最適である。北回り便（ソウル乗換え）でありながらイメージが悪いため非常に割安である。この時期であれば10万円程度で往復できる。ゲート・インはいくつかの空港が選べるが、チューリッヒがよいと思う。というのは、チューリッヒのクローテン空港は地下が鉄道の駅になっていて、15分も電車に乗ればもう町に着くのでとても楽だからだ。到着するのは夜なのでその日は駅前のホテルに泊まることにする。チューリッヒの町はとても趣があるので、翌日の午前中に町をぶらついたあと、昼頃の列車でチロルに向かえばよいだろう。車窓からの眺めは素晴らしく、のどかな風景を1時間半ほど楽しんでいるうちに列車はスイスからオーストリアに入る。フォアアールベルク地方をしばらく走るといよいよチロルである。

チロルはオーストリアの西部に位置するアルペン地帯である。州都はオリンピックを2度開催したことで知られるインスブルックだ。インスブルックは人口15万人の大きな都市だが、その周辺には昔ながらのたたずまいを残した町（村）が数多く存在している。チロルは谷一つ越えただけで、方言も風習も、そしてチーズの味さえ違っているとされている。のんびり過ごすにはこうした町の中で気に入ったところに滞在するとよい。どの町も素朴な人情にあふれている。この季節ならどの町も空いているから、町に着いてから宿を探せばよい。お勧めはペンション（民宿）だ。観光案内所で紹介してもらってもよいし、町を歩いていて気に入ったペンションに飛び込んでよい。とにかく、ほとんどの家がペンションをやっているのではないかと思うくらい数が多い。ペンションは空き部屋があるときは『Zimmer Frei(空き部屋有り)』という看板を掲げているので、とても分かりやすい。3階建てくらいの木造のどっしりした建物が多く、ベランダは花で飾られ、外壁には美しい絵が描かれている。日本人が思い描くペンションそのものである。たいてい1階がオーナーの住居と食堂になっていて、

2階から上が客室となっている。

ペンションのオーナーといっても、日本のようにペンション経営で生計を立てているというのではなく、旦那さんは普通の仕事を持っていて、奥さんや娘さんがペンションの切り盛りをしているというケースも多い。だから、簡単な朝食（パン・ジャム・ハム・チーズ・コーヒーくらいだが、とてもうまい！）しか付かないが、部屋はとても清潔だし、何ととっても安い。1人2000円から3000円で快適このうえないペンションに泊まることができる。部屋の鍵とともに玄関の鍵まで渡されるのだが、信頼されているような気がして嬉しくなる。これも治安の良さのあらわれだろう。

さて、どのように過ごすかは皆さんの自由だが、アルプスの山々をのんびりハイキングするのを勧めたい。まず町の食料品店に行って、自分の好きなパンとチーズとハムで昼飯用にサンドイッチを作ってもらおう。そしてワインを水筒に詰めれば準備万端である。リフトやケーブルカーでかなり高い所まで行けるので、足に自信のない人でも大丈夫だ。3000m級の山々や一面に広がる花畑をながめながらのんびり歩いていると、放牧された羊や牛に出会うこともあり、これぞチロルという感じだ。そして、眼下に氷河が見えてきたときには、その美しさにはっと息をのむほどである。

毎日ハイキングをしてもよいが、疲れたら町のプールで泳いだりサウナに入っただけで疲れを癒したらよい。ゴルフ場のある町もあるし、夏でも氷河ならスキーもできる。夜はチロルの歌（ヨーデル）でも聴きながら大いにビールを飲もう。女性にはシュナップス（果実酒）がおすすめだ。そして、レバークネーデルズuppe（レバー団子入りスープ）、シュニツェル（子牛のカツレツ）、グラーシュ（パブリカ入りビーフシチュー）などの地元料理を楽しみたい。

せっかく遠くまで来たのだから現地に最低1週間くらいは滞在したいところだ。贅沢をしなければ、現地での滞在費は1人5～6万円くらいで十分だろう。そして、帰りはチューリッヒ（あるいはフランクフルト）からソウル経由で成田に戻って来る。

さて、いかがだろう、チロルでののんびりした生活は。10日間ほどの旅行でも15～16万円ですんでしまう。最近では格安のパック旅行でヨーロッパ1週間12～13万円などというものもあるが、パック旅行というのは行程が決まっただけで融通がきかないし、強行軍のものが多いため疲れてしまうのではないだろうか。思う存分のんびりと自由に過ごしたい人にはパック旅行は向いていない。パック旅行のように係員がついていないと言葉が通じないのではないかと心配するかもしれないが、全く問題ない。私など英語もたいしてできないが、ホテルに行けば相手は泊まりたいのだなと思ってくれるし、レストランに行けば相手は食べたいのだなと思ってくれる。あとは片言の英語と身振りで十分である。

今やパリでもロサンゼルスでも時期と航空会社を選べば、往復5万円台の運賃で行ける時代だ。皆さんが個性あふれる手作りの旅行でいろいろな経験をされることを期待する。

